

ハカラメ

田森 睦夫

竹芝棧橋から小笠原丸に乗り込み、海を走った。僕の旅だった。独りでの長旅は、初めての事だった。会話する者は、誰もいない。でも、寂しさは感じなかった。むしろ当然のように、それを受け入れていた。

僕はデッキに立ち海を眺めていた。もう時期、桜の季節を迎える東京の海は、どんよりと鈍い黒色で染まっていた。

東京の街並みが、遠のいて行く。人の群れから漸く逃れられる気持ちで、幾分気持ちは軽かった。これから、二十五時間半の船旅が始まる。午前十時発、父島到着は明日の午前十時半だ。

東京湾の風は、冷たかった。しかし、僕はデッキを離れなかった。ただ、遠のく沿岸のコンビニナートの群れと、その奥に見える高層ビルを眺めていた。

何故僕は、ここに居るのだろうか、何万回かの疑問を頭に浮かべていた。そして、僕は、彼の事を思い出した。

高校生だった当時、彼とはよく旅に出た。北海道一周の旅も、その一つだった。あの当時は、楽しい思い出ばかりだ。田舎の駅舎でコンロに火を入れ、即席ラーメンを作り、駅舎の人に注意されたり。利尻島では、夜、大雨にあい、大変な事態にも関わらず、蚊に刺された顔に、お互い高笑いした。

彼が大学に入り、三回生あたりから様子が可笑しくなった。勉強のしすぎなのか、不規則な生活のせい、彼は精神的に病んでいった。

ある夏の日、彼は旅に出た。その時渡ったのが、小笠原諸島である。そこから、一通の手紙と共に、一枚の葉っぱが送られて来た。その葉の名前は、分からなかった。それは不思議な植物で、葉っぱを壁にでも貼っていると、その葉から芽が出て来るといふ植物である。僕はその葉を求めていた。南の島の珍しいものなんだろうと僕は直感したが、調べて見ると南の島の雑草らしく、何処にでも生えているものらしかった。名前は、ハカラメという、性質をそのままカタカナにしたものだった。

僕は大学へ行けなかった。仕事もアルバイトで凌ぎ、彼の事を羨んだ。何か

青春を謳歌しているかのように思えたのだ。

しかし、回りの同期の学生たちは、彼を変人扱いしていたという。そして、旅から帰って来た数週間後、彼は自殺した。

皆は、『病気だったんだ』と言うが、僕は納得が行かなかった。火葬後、彼の母親は言った。「火葬の灰の中から、細い針金のようなものが三本出て来たの、あんたも気お付けなさいよ」首の辺りらしいが、僕には何を言っているのか分からなかった。

僕は彼から貰ったハカラメが実際に自生しているところを見てみたかった。そして、彼の旅の道のを体感したかった。何故そう思っているのかは、僕の札幌での環境の異変にあった。

とうに、外海に出たらしい。波が荒い。船が走る白波は、軌跡となって海を割っていた。波は白かった。限りなく白い色に、僕には見えた。

午前中デッキにいた僕は、風が強くなって来たので、船内に入った。入ったところに、売店がある。何人かの、親子連れが、何かを買っている。

僕は大広間を横目に、一等船室へ入った。奮発したのだ。しかし、自分の中では、人と一緒にいたくないという思いが、強く働いたのである。僕の環境の変化は、凄まじいものだった。必然的にその環境は、被害妄想的発想に僕を染めていった。

こうして遠くへ来ると、まるであの時のことが、嘘のように晴れやかになるものだ。と普通なら思うものだろう。しかし、僕の心は、潰れてしまったかのように、人と話す気持を持たず、札幌を出てから殆ど人に言葉を発していなかった。

そうなるからには、何時も心の中で、他人が怒ろうと、奇声を上げて、覚めた目で人を見るのが常だった。そんな今の自分を何とかして変えたいと思っていた。心の奥底にめり込んだ意識というか、人間としての心が騒ぐといった動きは、この小笠原丸に乗船しても、そう大きな変化は僕には感じられなかった。

船室は、一人用かと思いきや、ベッドが二つある。一等船室と言えども、二人用らしい。すると、もしかして、誰か来るのか……。急に嫌悪な気持ちになった。整理の着かない出来事を振り返るのに、僕は一人でいたかった。そして、

前触れも無く男は、入って来た。

「やあー、同室は君かあ」突然ドアが開き、大きな声が室内に響き、僕の心臓は動悸を始めた。全身の神経が逆立ち、眠っていた気が一気に引つ張り出された感覚になった。僕は大きく目を見開き男を凝視した。

「やあ、驚かせたみたいだねえ」とハッキリとした口調で、言葉を発していた。僕は嫌な奴が来たなあ。と思った。でも、これが普通の人なのかなあと、随分心の様子が違う男に、少し羨ましさを覚えた。

彼は、向かいのベッドに荷物を置き、腰を下ろした。そして、僕の顔を見るなり、「何処から来たの」と聞いてきた。僕は、直ぐに言葉が出なかった。僕は二三テンポ遅れて「北海道……」と素っ気無い声で、答えた。そんな様子も気に留めずに、「北海道かあ。随分遠くから来たねえ。旅行かい」と男は歯切れよく、言葉を突いた。

「ええ、まあ」と僕は愛想のない言葉で、答えた。

「小笠原、初めてかい。小笠原は、良いところだよ。日本の最後の楽園だね。私は、もう今回で十数回来ているよ。よくダイビングをしに来るんだ」と、僕は何て元気な男なんだと思いつつながら、突然の勢いの良い人間と接したせいか、頭が痛くなってきた。

僕は男に言った。「ちょっと、気分が悪いので、横になるんで……」すると男は、「船酔いかい。少し横になって、後からデッキに出て海の風に、吹かれるといいよ」と相変わらず、室内に響くような声で、言った。僕の頭は益々痛くなった。

荷物をベッドの隅へ追いやり、それを枕代わりにし僕は横になった。そして直ぐに眠りにいった。

「足が見えるぞ。まだ、中にいる。そんな布団に潜り込んでも無駄だ」

「精神衛生課の者だけど、あそこの一階のアパートの住人変なんだって。犯罪、犯しそうだって言うしよ」

「動くな！ 今動くな！ 外から見える。伏せろ！ そのまま動くな。見つかったら捕まるぞ」

息苦しかった。女性の声でハッキリと二階から聞こえて来る。僕は思わず床に伏せていた。「ようし、そのまま動くな！」一体何が起きたのか理解出来な

かった。息苦しさが増した。僕が一体何をした。此処にいては駄目だ。外へでよう。取り合えず、気分転換しよう。

「おーい、外に出たぞう。見つかるなよお。お前らそっちから回れ」

僕はそんな声を無視して、地下鉄北十八条駅行き市営バスへ乗った。バス内は、静かだった。いったい何が起きたんだ。と心は動揺していた。

しかし、静かだったバスの中から、「アイツダ」という言葉が、耳に入ってきた。その言葉だけで僕の事かと、強く意識した。回りを見ると、乗車している客は皆変わったところはなかった。僕は人の波に紛れ、北十八条駅の地下鉄南北線へ乗り換えた。そして、大通公園の駅で降りた。

何か人に付けられている違和感を覚え、僕はしきりに後ろを気にしていた。しかし、変な奴はいなかった。

街の中を少し歩き、須貝ビルへ入った。映画を観ることにしたのだ。すると、「あのビルに入ったぞおー」と、どこからか、大きな声が聞こえて来た。僕はまた無視し、『南極物語』を上映している映画館に入った。映画は既に上映しており、立ち見で溢れていた。僕は一番後ろに背をもたげ、人のシルエツトを避けながら、映画を観ていた。暫くすると、ホールから大きな声が聞こえた。「ここだ！ お前らそっちへまわれ。逃がすなよ。ここから出すな！」とホールに響いて館内にも聞こえてくる。しかし、誰もその声を気にしている人は、いなかった。声は、僕の名前を叫ばなかった。ただ、獲物を追い詰める狩人のように声を張り上げ、獲物と化した僕は、静かに神妙にホールの様子を窺っていた。

また、考えていた。これは僕の事なのか。いったい何が、起きているんだ。館内の人たちは、この異変を無視しているのか、それとも聞こえないのか、何も起きていないかのように、当たり前前に映画を観ている。

「中から、奴を追え！」という言葉が聞こえてくると、僕の手には汗が滲んでいた。急に横の最後尾のドアが勢いよく開いた。入って来たのは若い男で、睨めつけるように館内を見ると、僕に視線を止めた。

僕は息苦しさを覚え、目を覚ました。夢か。

リアルだったその夢に、札幌での事を思い出した。

その瞬間、船内がムツとした空気に包まれているのに、気が付いた。「暑い」

亜熱帯に入ったんだと思った。

「暑くなって来たね。明日の朝には、小笠原諸島に入るよ。それにしても、よく眠ってたねえ。旅疲れかい？」と、人の心持も分からず、男はズケズケと話掛けてくる。僕は直ぐに、「ちよつと、デツキ行つてきます」と答え、船室を出た。

今、何時だろう。と腕時計を覗くと、午後の九時半頃だった。この南国の大地でも僕の心は、沈んでいた。デツキに出て、何とかこの状況を喜ぼうとした。この体感の暑さは異常だった。それに答えようとニコニコしながら万歳してジャンプまでしたが、無理だった。

デツキで暖かい風に身を委ね、真つ黒な海に目を落とした。随分、寝ていたんだなあ。頭の痛みは、消えていた。通る風が、気持ち良かった。気のせいか、心が癒されて行く感じがした。

札幌では、元町の二十四条通り近くのアパート守谷での生活が五年くらい続いただろうか。それにしても、何だったのだろうか。何が僕に起きたのだろうか。何度も同じ事を考えていた。何故、僕は人から追われなくてはいけないのだろうか。この旅も、あの環境から逃げ出した結果だった。

僕には、好きな女性がいた。郁美という。ダンプの運転手をしていた僕は、彼女が働いていたライブハウスに足しげく通った。しかし、僕の口から『好きだ』という言葉は、出なかった。それでも僕は、郁美の気持ちは何故か分かっていった。ある日、僕は郁美を食事に誘った。彼女は快諾した。出会ってからもう二年程になるが、初めてのデートだった。

僕は浮き立つ心を一生懸命抑えていた。最初は、映画を観た。『F』だ。郁美が、涙を流しているところを始めて見た。僕は映画どころではなかった。ずっと、彼女の横顔を見ていたのである。

映画の後は、食事をした。パスタだ。余り話す事が見つからず、僕はついに言葉にだした。「好きだよ」すると彼女は、意外な言葉を発した。「うそっ！」と大きな声で、叫んだのだ。僕はそれ以上言葉が出なかった。無言のまま店を出てオーロラタウンを二人で歩き、ポールタウンの方へ向かうところで、「私これから仕事だから、ここでいいよ」と、郁美は言った。僕は「じゃあ」と言っ、その場で分かれた。

それから数日後、彼女は店を辞めていた。僕は気に成り、彼女のアパートへ行って見たが、アパートも引き払った後で、何処へ行ったかも分からなかった。環境の異変が起きたのは、その辺からだ。最初に、ダンプ会社の先輩の仮屋さんが、しゃがみながら車の調整をしている時だ。僕が近くへ行くと振り向き、小声で「郁美のところへ行つてやれ」と言ってきた。僕はドキツとして、言葉も出なかった。今思うと、『何で知っているの』くらい聞けば良かったと思つている。

すると次の日、会社へ出かける時、玄関の所にいると天井から、やけに人の声が耳に入つて来る。最初は二階の住人かと思ひ、気にも留めなかった。しかしまた次の日も、玄関に立つと、天井から沢山の人の声が聞こえる。いったい何なんだと思ひ。居間に行き、玄関に目を向けると、確かに玄関の方から声が聞こえる。また、玄関に行くと、天井から声が聞こえる。よくその声を聞くと、あのライブハウスの連中の声に聞こえる。それも、どこかの部屋の中で、話し合っている声だ。

どうしたことか、理解できなかつた。何度か居間に戻り声を聞くと、確かに玄関から聞こえる。僕は二階の奴が、何かやっているなと思ひ。二階に、確認に行った。チャイムを押すと中から若い男が、顔を出した。「はい」と若い男は、何も無いような素振りで、現れた。

「なんででしょう」

「この下のものですが、二階から煩い音が聞こえる。ちよつと中見せて貰つていいかい」と、何か出てくるだろうという期待を抱き若い男に僕は尋ねた。男は「はい」と一言いつて、簡単に僕を部屋の中へ招き入れた。

僕は部屋の中を見て驚いた。何も無いのである。冷蔵庫も茶箆筒、テーブルなど生活観を感じる物がまるで無く、ガランとした部屋だった。

「ちよつと奥も見させてもらうよ」と僕は畳の部屋へ行くと、ベッドがあるだけであとは何も無かつた。押入れの中も見したが、何も無かつた。僕は、玄関を指し、この辺から声聞こえないかい。と聞いてみたが、若い男からの返事は「分かりません」だった。確かに、耳を立てても何も聞こえない。「じゃ、失礼する」と言つて、僕は彼の部屋を出た。僕は寒気を覚えた。幻聴でもあるまいし、僕の玄関からだけしか聞こえないなんてどういふ事だ。

一階へ下り、自分の部屋に入ろうとすると、扉の内側から、あの騒がしい声が聞こえて来る。扉から離れて、アパートの隅へ行き、耳をそば立てると、扉から声が漏れているのが分かる。

僕は、その不思議な現象を考えながら、会社へ遅刻して出勤した。遅刻や無断欠勤すると、給料から五千円引かれるので痛かったがそれよりも何よりも、あのアパート変だぞ。という気持ちの方が大きかったので、仕方がないと諦めた。その日は何処へも出かけず、会社の碎石場の碎石をシヨベルカーで、集めていた。

夕方、作業も終わり帰宅に着いた。アパートからは、何も聞こえなかった。やっと静かになったか、と思いい部屋にはいった。部屋の中も静かだった。しかし、この部屋、なんだか変だ。誰かが僕の居ない間に、この部屋に入ったような妙な気がした。その時は、気のせいだと思い、考えを否定した。

数日何も無く過ごした。しかし、また突然今度は外から、「ここだろう。この奴だべ」と声が聞こえてきた。この辺りは住宅街なので、色んな人がこの辺りを通る。最初はそう思ったが、直ぐにそれを打ち消した。

「郁美の男って、どんな奴よ」という言葉が耳に入ってきた。そして、その外にいる連中が、急に近くなった。「馬鹿だっというべや。ばっくり、やってやれ」僕は自分が襲われるような、危機感を覚えた。

「郁美、好きだよ」「私の男だよ」と甘い声が聞こえた。女も居るようだ。僕は黙って外の様子を窺っていた。

話声は永遠に続くかのように、外からの三四人の声が、部屋を満たし僕の心を閉塞していった。しかし、決して僕の名前が出ることはなかった。僕は、自分の事じゃないと思いつながら、脅し文句や心当たりのある言葉に、次第に心が入って行った。

もう三時間が過ぎたが、外からの話し声は続いた。僕は気分が悪くなり、その日は早く寝た。

朝起きて外を見ようと玄関の扉を開けると、僕は吐き気を覚えた。出入り口の所に、動物の死体のようなモノが、無造作に置かれていた。そのモノは、腸が溢れ出て、塊になっていた。もうどんな生き物だったのか、判別不明である。僕は吐き気を抑えながら、スコップで土の方へ押しやった。

その日は気分が悪く、不気味さも加え会社を休んだ。何て連絡すれば良いか分からず、無断欠勤である。

夜になるとまた、外から声がしてくる。「ぶっ殺すぞ」「郁美どうなったと思うのよ」「おらあおらあおらあ、どうすんだよ」僕は怯えていた。気がどうかなりそうだった。

「俺、チャカ持つてるぞお。一発食らうかあ」

僕はせめてもの抵抗と思い、ペンと紙を取り、外で話していることを書き留めた。そして、少し静かになった時外へ出てみた。誰も居なかった。窓からは死角が多く、人を確認することが出来なかった。

もう午前一時を回っていた。すかさず、僕は東警察署へ走った。玄関口の待合椅子に座っているとところに、当直の刑事が一人やって来た。刑事は僕の横に座り、「どうしたの」とやんわりと話しかけて来た。「実は夜になるとこんなこと、外で喚いている連中がいるんです。それで、夜眠れないんです」と言っ僕は、書いた紙を見せ刑事に渡した。刑事はその紙を読んで「これは、大変だ」と言い、署の奥へ行った。暫くしてやって来た刑事は、「こつちでも調べて見るから」と言って今日は帰るように言われた。

それから、何回東警察署に通ったことか、そのころには、僕は仕事も無くしていた。

暗闇の中から、船が波を蹴散らす音が聞こえる。闇の地平線辺りを見ていると、闇に吸い込まれて行きそうになった。足が竦んだ。体の寒さではない、恐怖に鳥肌がたった。

「扉、閉めますよ。デッキに居る方、中に入って下さい」巡回の船員の声が耳に入り、僕はデッキをあとにした。時間は十時になるうとしていた。

明るい艦内に入ると、ホットした。その時思った。僕はもしかしたら、足を踏み入れてはならない環境に、踏み入ってしまったのではないかと。

また、僕は大広間を通り船室へと入った。

船室の扉を開け中に入ると、男は窓から外を眺めていた。

「戻ったかい。随分ゆっくりだったね」と後ろに立つ僕の顔を見て言った。彼は、窓から顔を離し、ベッドへ腰を掛け直した。「さつきより穏やかな顔になったねえ。やっぱり風に当たったのが良かったなあ。そう言えば、名前聞いて

いなかったね。私は、相馬と言います。君は……」

「僕は、秋田です」僕はベッドに腰を下ろしながら、答えた。

「そうかあ、秋田君か。小笠原の先輩として言っとくが、父島行ったらカメ食べろよお」

「カメって、あの亀ですか？」と僕は突然の展開に驚いた。

「そう、海亀だ。旨いぞお」

「そう言えば、相馬さん若い感じしますが、幾つなんですか」と気になった事を言ってみた。何だか少し心が開いた気がした。

「そうか、歳かあ……。君は幾つなんだい」

「僕は二十四です」と抵抗も無く言えた。

「二十四かあ。若いねえ。私は、丁度四十になるかなあ。もう、おじさんだね。でもねえ、さっきのカメの話だけでも、本当に旨いから、特に実より脂身が旨い。必ず小笠原着いたら、店探して食べると良いよ」と気さくに、話してくれた。

僕は相馬さんへの敵意のような気持ちは、薄らいだが相変わらず、心は重かった。しかし、相馬さんの人の良さそうな人物感に、逆にホットしていた。

「相馬さんは、何を仕事にしているんですか？」と、休日でもないのに、何日も小笠原に行ける身分が、僕は知りたかった。

「仕事かい。フリー事業かなあ」と、ちよつと悪戯っぽい笑みを浮かべ相馬さんは、話した。

「フリー事業って何ですか？」と、真面目な顔で僕は聞き返した。

「はあはあはあ……。君は真面目だなあ。そんなに、真剣にきくなよお」と、大きな声を出し笑いながら言った。

「私は、自営だ。探偵の仕事をしているんだ。で、趣味がダイビングだから、時折こうして、船に飛び乗って行くんだよ」と、僕の驚いた顔を見て、どうだっただけで目を輝かせた。

「探偵ですか……。凄いですねえ。何だか、カッコいいですねえ」と、仕事も無く、彷徨っている僕とは、やっぱり違うんだ。と思った。

「ま、人生色々、あれも人生、これも人生だね」と、肩を落とした僕を諭すように相馬さんは言った。

僕は、相馬さんならハカラメの事を何か知っている気がして尋ねてみた。

「相馬さん、何回も小笠原行っているんなら、ハカラメってご存知ですか」

「ああ、ハカラメねえ。知ってるよ。葉っぱから芽が出る奴だろう」

「そうです、そうです。実はそれを見に、来たんです」僕は、いきなり親近感が沸き始めた。

「ハカラメの事何か知っていたら、教えてくれませんか」と、珍しく積極的に僕は相馬さんに聞いていた。

「ハカラメかあ、そうだなあ。あの植物は、かなり食欲な植物だ。学術名は、セイロンベンケイソウって言うんだ。去年の夏、ハカラメの葉を摘んで、自宅で栽培してみようと思ってね。水を張った皿に葉っぱを入れ一週間くらいで、葉から芽が出て来たかなあ。鉢に植え替えたんだが、半年くらい経って五センチくらい伸びた。なかなか伸びないが、鉢の中が小さなハカラメだらけになってねえ。驚いたよ」と、真面目に話してくれた。

僕は矢継ぎ早に、「どのくらい、伸びるものなの。花はどんな花が咲くんですか」と、自分でも驚く程に、心が躍っていた。

「でも何故、ハカラメを知っているの。ただの雑草なのに」と相馬さんは、不思議そうに、尋ねて来た。僕はハツとした。でも、嘘を言ってもしかたがないと思う。今は亡き友人が小笠原へ来たとき、葉っぱを送ってくれた事を話した。すると、相馬さんは、

「そうかあ。友人がねえ」と僕に優しい目を向けた。

「花と高さだったねえ」と、窓の外の暗闇に目を向け話始めた。

「花はねえ。何ていったらいいかなあ。花自体は、直径一センチほどの、長さ二三センチの円筒の花でねえ。色はあ、茎に近いところが、赤色でそこからグラデーションが掛かり、先端に行くとき緑色になっている感じかなあ。背丈は、約一メートル程もあるかねえ」と、時々窓の外へ目を送り話してくれた。

「意外と綺麗な可愛い花が咲くんですねえ」と、少しうつむき加減で答えた。

「秋田君」と、相馬さんが真面目な顔で、僕を呼んだ。その瞬間、僕は「はい」と答えていた。

「さつき、ハカラメを知ったきつかけを話してくれたけど、まさか君……」と、言葉を切った。僕は、その言葉を察し答えた。「死のうと思っっている訳ではあ

りません。ただ、死んだ彼の事を思うと、悔しいというか……、横たわった彼を見た時、滅茶苦茶に殴ってやりたいと思ったんです。死への怒りではなく、彼本人への大きな怒りが、心の中から沸いて来たんです。そんな彼ですが、彼が何故死んだのか、僕が札幌で体験した事を考えると、少し分かったような気がしたんです」と、僕は素直に答えた。

「札幌かあ。どんな街、なんだろうね。想像もつかないねえ」と、相馬さんは、溜息をついた。そして、言葉を続けた。

「札幌で何があったか分からないが、ハカラメっていうのは、さっきも言ったけど、凄まじく貪欲な生き物なんだよ。普通は、根や球根、種などから芽をだすんだけど、奴らは葉っぱからだ。これは、凄い繁殖力を意味しているんだ。地に落ちた葉から、芽を出すんだからね。」

でもねえ、見習うところがあると思うんだ。我々人間なんて、何かを犠牲にして生きているみたいなんなんだよ。だから誰一人だって、俺は独りで生きているんだなんて、言えないんだよ。僕はハカラメのように、地に落ちてても、地を這いずり回っても、必ず芽を出す人間になりたいねえ」と、一言ひとことを噛み締めるように、話してくれた。僕も同感して「そうですね」と、ただただ返す言葉もなく答えた。僕は、相馬さんにも若い時、何かあったのかなあと、思った。

「そろそろ寝ようかあ。明日は早いよ」と、相馬さんが言うので、僕も合わせて「はい」と答え、ベッドに横になった。

「電気消すよお」

「構いませんよ」

「窓は、開けとくから」

「はい」

暗い船室で、僕は大きな深呼吸を数回した。頭が少しくらつとしたが、気分が良かった。こんな気分、忘れて居た程だった。そして、僕は思った。相馬さんでよかったと。

波音が、心地よかった。今の温暖な空気も気持ちよ良かった。忘れていたことを思い出したような心地良さだった。僕は黙って、暗い空間に目を向け、静かな夜を迎えていた。

窓の外は、明るかった。太陽が昇ったようだ。昨夜より暑さが増したような気がした。時計は、朝の六時をとうに回っていた。隣のベッドを見ると相馬さんが居ない。何処へ行ったのだろうと思いつつ、ベッドから起き窓の外へ目を向けた。

海は、青かった。「これが、南の海かあ」と僕はひとり言を言った。綺麗だった。空と海が、晴れ渡っていた。

暫く、窓から外を眺めていると、相馬さんが入って来た。

「おっ、起きたか。シャワー浴びて来たら。まだ、父島に着くの三時間以上あるから、船室でのんびり出来るよ」と、相馬さんは、もうシャワーを浴びて来たようで、髪が濡れていた。

「じゃ、行って来ようかなあ」と、僕はリュックからタオルと石鹸を出し、船室を出た。

廊下を通り、階段を上り、デッキに出る通路に出た。売店のあるホールだ。シャワー室は、その空間にあった。デッキに出る扉は既に開いており、数人デッキに出ていた。売店も開いている。

シャワーは、爽快だった。もう何週間も風呂に入っていなかった。本土の垢をシャワーで全て流すかのように、隅々まで綺麗に流した。生きている実感が、あった。「俺は、生きてるぞおー」と、無性に叫びたかった。

シャワー室を出て、デッキへ出た。ザザザザー、と船が波を蹴散らす音が響いた。船は、波も風も切っていた。

逃げに逃げた最果ての地が、小笠原であった。波の音と暖かい風と暑い太陽が、身体を包んだ。僕は叫んだ。声ともつかぬ音で、叫んだ。「ヌオオオオー」と。

しかし、波音は、負けなかった。僕は、二三回大きな深呼吸した。肺の中の、本土の垢を落とすかのように。そして、もう一度叫んだ。「バカやろうおー」と。今度は空しく波音の中に、声は消えていった。

もう、戻りたくなかった。ずっとこの空間にいたかった。心の重さを感じたかのように、ふと、相馬さんとの会話を思い出した。

「貪欲な植物か。僕に成れるかなあ」とすると、どんなに辛くとも涙を流した

事のない、僕が涙を流した。何に泣いているのか、自分自身理解出来なかった。すると、心が軽くなったのを感じた。そして思った。僕の身体から何が出て来ても、それは焼かれた時分かる。首に三本の輪があっても、焼かれる時にしか分からないんだ。完全犯罪を憎んでも、証は僕の死んだ時。そして闇に飲み込まれて行くんだ。

札幌へは、もう帰るまいと海に誓った。そしてせめてまだ、自分が若い事に望みを掛けた。そして、また海に向かって叫んだ。「若さは、バカさだあー」気持ちには、重苦しさもあったが、少しでも前向きになれたことが幸いだと思っただ。そして、呟いた。「僕も、ハカラメだ」

船は、青い海を切り海面を飛んでいた。もう時期父島だ。気ままの一人旅だが、この空間を味わおう、この空を味わおう、この海を味わおうと、僕は心に決めた。

「キヤー……」突然船内のホールから女性の叫び声が聞こえた。僕は、ホールへ入って見た。すると若い男が、売店が対面する壁を背に上半身裸に、靴を脱ぎ正座して、刃物を持っていた。僕はその光景に、全身に震えが走った。

男の三メートル程離れたところに、若い女性が棒立ちになっている。多分あの女性の叫び声だと、僕は直感した。

男は、大学生くらいの男で、刃物を上に翳し喚いている。

「俺は、天からの声を聞いた。お前は、もう全てを体験した。最後に死に場所を探しなさい。そして、来なさい。私の元へ」俺は知っているぞ！ 貴様らの事も、日本国の仕組みもみんな知っている。俺は、これから死ぬ、腹を掻っ捌いて死ぬ。巻き添え食いたくなかったら、近づくな」男は、刃物を翳し大きな声を張り上げ言った。しかし、そう言った男の顔は、意外と穏やかにも見えた。

僕は、この急展開に、呆然としていた。天の声って、一体なんだろう。と男の言う言葉を僕は考えていた。

「冷静になりなさい。一体何があったの。まず、その刃物をこちらへ渡しなさい」何時の間にか、船員数人が駆けつけ、男を諭していた。野次馬が増えたところに、船長が来た。

「まず、皆さんを船室に入るよう言いなさい」と船員に、話しているのが聞こえた。

「近づくな！」男は、近寄る者を一括した。そして、言葉が続けた。

「国が、俺を捕まえようとしているのは、分かっている。俺がテレパシーで人の心を読める事が、ばれたらしい。俺は知っているぞ。ここの乗船者も、自分たちの義務を負おうと、小笠原へ行くのを。旅行するのが、貴様らの、義務だということ、俺は分かっている。国の奴が、俺を尾行し、街が俺を監視しているのも分かっている。貴様らいいか、俺は逃げも隠れもしない。俺は、日本男児だ。今俺は、此処で切腹する。そして、天へ行く。貴様らの手の届かないところに行くんだ。はあはあはあはあはあはあ……」と男は勝ち誇った笑いを揚げた。

「まず、冷静になりなさい。君の言う事が、本当かどうか、私ともつと話そうじゃないか」船長は、男を止めようとしたが、男の差し上げた右手が、腹へ走った。刃物は、男の腹へ突き刺さった。

その瞬間、船員たちが男を抑えに掛かった。男は、叫んだ。「触れるなあ……」と喚き、暴れようとした。腹から血が溢れていた。身体を数人の船員に押さえつけられ身動きが取れない男は、しきりに「触るなあ。俺から離れろお」と空しく叫んでいた。そこへ、白衣の着た医者らしき人が、男の腕を取り「押さえなさい」と言うと、注射を持ち男の腕に液を注入した。男は数分もしないうちに静かになった。

船長は「直ぐに医療室へ」と船員に命令して、男は三人の船員に抱えられ、ホールから消えた。ホールの男のいたところには、血が転々とあった。思ったより血痕が少量だったことに、僕はホットしていた。

「直ぐに、此処を清掃しなさい」と、船員に命じ船長は、男が連れていかれた通路に消えて行った。

船員たちは、ホールの血痕のあるところに水を撒き、清掃に入った。その速さに、僕は驚いた。清掃は十五分程で終わった。

「乗船の皆さん」艦内放送が入った。「船長の柏木です。先ほど、一階ホールにて、若い男性が騒ぎを起こしましたが、男性を取り押さえました。男性は、腹部に若干の傷を負いますが、命には別状ありません。皆様の船旅をお騒がせ

しましたこと、誠に申し訳ございませんでした。

当船は、あと一時間十五分ほどで、父島の二見港に到着する予定です。最後の船旅をごゆっくりお過ごしください」と、淡々とアナウンスが流れ、ホールは、以前の静けさを取り戻していた。

三十分もすると、ホールに下船する乗船客の姿が目に着くようになった。一部始終を見ていた僕は、まだ興奮覚めやらずで、心臓がドキドキ鳴っていた。しかし、南国の空間は、否応なしに、出来事を遠い事のように忘れようとしていた。

船室には、相馬さんが居た。

「騒ぎがあったようだね」と、相馬さんは何時もの温和な顔で言った。

「ええ、凄かったですよ」と平静を装って僕は答えた。

「見てたの？」と、相馬さんが聞いてきた。

「ええ、ちよつと動けなくなっちゃって」と、怯えて立っていたことなぞ言えなかった。

「そろそろだねえ。父島」と相馬さんは話を変えて来た。

「そうですね。小笠原ですね」と、感慨深そうに僕は言った。

「皆さん、本日は小笠原丸をご利用頂きありがとうございます。今船は、港に入りました。あと、三十分程で接岸します。南の島で、好い思い出を作られることをお祈りして私からの最後のアナウンスとさせていただきます。船長の柏木徹でした」と、事件の事には触れなかった。出来事が、もう遠い事のように思えた。こうして、忘れて行くんだなあと思つた。

「そろそろ、出るよ」と、相馬さんが言った。

「もう少し、ここに居ます」と、僕は相馬さんに言った。

「そうかあ。じゃ、ここで別れよう。いい旅を……」と言って、相馬さんは船室を出ていった。僕は軽くお辞儀をして、相馬さんを見送った。

僕は、窓の外を見ていた。人が港に沢山集まっている。そして、船に向かつて手を振っていた。もう、接岸まじかだ。

人の顔がはつきりと分かるようになった。船は、汽笛を鳴らした。人の顔は、表情まで分かるようになった。赤いランプを点灯させ、救急車が港に入ってきた。

あんなことが、あったなんて嘘のようだった。しかし、現実には、救急車が接岸する船を待っている。そんな、現実が悔しかった。無性に、泣きたい衝動に駆られた。

自殺した友人そして自分自身の出来事、先ほどの男。皆何かを体感している。そして、僕は思った。戦っていたんだ。見えない大きな力と戦っていたんだ。まだ、他にも色々な事でその世界と戦っている人たちがいる。そして、負傷したり散って逝く者がいる。戦場だ。この世界は何でも在りの戦場だ。

僕は誓った。ハカラメのように食欲に生きなければ、この世界は潜り抜けられないぞ。地を這いずり回っても、何処かで倒れても生き続けてやると。

そう思った瞬間、天井の隅の方から、「そうだ。そして、ここまで上がって来い」という太い男の声が、はつきりと耳に届いた。

船は、接岸したらしい。僕は、強い怒りを覚えた。そして、船室を後にした。

「お前馬鹿だべ」

「何で……」

「だって、変じゃん」

「だからって、何でお前に馬鹿って言われなきゃならないんだ」

「ばーか、ばーか……、みんな知ってるんだわ。ばーか、ばーか……」

「うるさい！」

「郁美死ぬぞ」

「お前を恨んで死ぬぞ」

「お前が何処行こうと、俺たちは消えない」

「お前男だろう？ だったら、切腹しかない。生きていたって、馬鹿の烙印押されたみたいなものだ。死こそ美学だ。切腹だ。切腹だ……」

大きな扇風機が、ゆっくりと回っていた。夢か……。窓の外は、まだ明るかった。白い壁が、印象的だ。南国の暑さが部屋の中を満たしていた。

下船して、民宿に入りそのまま寝込んだようだ。何かよく解らない夢を見た。

僕は決して頭は良くないが、他人から馬鹿呼ばわりされる謂れがないと思ひ、直ぐに夢の事は忘れた。

そう言えば、あの切腹しようとした男、今何処で何しているだろう。とふと思つた。僕も変になりつつあるのかなあと思うと寒気がした。

時間は、もう夜の七時をとうに回っていた。腹は空いていた。でも、部屋を出る気になれなかった。

『気分を変えよう。飯でも食べるか』と思ひベッドから起き上がり、気は進まなかつたが部屋を出た。廊下の奥が食堂らしい。テーブルが並んでいるのが見える。そこに向かつて僕は歩いた。

テーブルには、男二人組の客が座っていた。ビールを片手に、談義に華を咲かせている。裏側に繋がる扉があつた。そこからは、今流行の音楽が流れているのが聞こえる。僕は、裏側に出る事にした。

扉を開けると、そこは外で薫ぶきの傘のようなものが、四五本立っていてその下にテーブルと椅子がセッティングされていた。そこに、一組のアベックが、各テーブルに付いていた。

扉を背に左側は、カウンターになつていて、数人の若者が楽しそうに、話つていた。

カウンターの中には、綺麗なお姉さんが二人いて、客の相手をしていた。奥には厨房もあるようで、細身の男が、忙しそうに働いていた。

一人のお姉さんが、僕と目を合わすと「いらっしゃい」と一言言つた。

僕はカウンターの若者グループとは反対側の隅の椅子に腰掛けた。

「いらっしゃい。何飲みます」と最初に声を掛けて来たお姉さんが僕の前へやつて来た。

僕は条件反射のように、「ビール」と言つた。

中ジョッキの並々と注がれたビールを持つてくるなりお姉さんは「今日の船で来たの？」

「そうです」

「あら、じゃー大変だったわねえ」

「何がです」

「切腹自殺よ。あつたんでしよう」

「よく解りません」

「そうっか。でも、島じゃ、凄いや、噂よ」

「そんなんですか」余り船での事は話したくなかった。まるで、同類の人間が犯した罪のような罪悪感を感じていた。

「何、食べます」

「亀ありますか……」と唐突に言った。相馬さんからのお勧めの料理だ。

「ありますよ。煮付けでいいわよね」

「亀なら何でも……」

「お客さん、何処から来たの」と奥の厨房から声が聞こえた。

「僕ですか……、北海道です」

「えっ、北海道。こりゃーえらい遠いところから来たねえ」

「はい、亀の煮付け」

「油多目に入れといたから、食べて」

「済みません」

「この青いのが、脂身よ。食べてみて」

透明な海の色のように青い脂身に箸を入れた。ゆっくりと、口へ運んで舌の上に置いた。すると、ふわっと味が口全体に広がり、舌の上で溶けて無くなった。

「どう、美味しいでしょう」

「旨いですね。これが海がめですか」

「そうよ。小笠原の名物ね。でも、亀があるなんて、よく知っていたわねえ」

「船で一緒になった人に教えて貰いました」

「そう」

「あのう、今の船何時出港するんですか」

「明後日ね。三日間停泊しているはずだから」

「そうですか」

「ビール、まだ飲むわよねえ」

「はい」

はきはきしたその口調に、少し気の重さを感じていた。でも、これが若いと言う事なのかと思ひ、羨ましくもあった。

「すみません。ハカラメって知ってますか」

「ハカラメ？ 知ってるわよ。島のいたるところに、生えてるわよ……そうかあ、珍しいわよねえ。北海道じゃあ」

「この裏にも生えてますよ」と厨房の男が言った。

「そうですか。明日でも少し貰っていいですか」

「構わないよ。幾らでも持つてって」

「でも、よくハカラメ知ってるね」

「友人が、以前小笠原へ来て、葉っぱ送ってくれたんですよ」

「小笠原じゃあ、ハカラメ有名だからね」

「そうですか」

「それじゃあ、ご馳走さまです。幾らですか」

「あら、もう行っちゃうの」

「はい。また、明日来ます」

「ありがとうございます。今夜は星綺麗よ……」

部屋に戻り、ベッドに横になった。無性に泣きたなくなった。久しぶりに、人に接したような気がした。

明くる朝、早く目を覚ました。外へ出て港の方へ歩いた。潮風が気持ちよかった。港には、まだ誰も居なかった。大きな小笠原丸が接岸し、波は穏やかだった。空も晴れていた。太陽は既に昇っており、日差しは肌に刺さるように痛かった。

僕は一番恐れている事を思っていた。

『僕は病気なんだろうか……』

空気は、潮の香りしかしない。でも、それで僕には十分だった。ただここに居るだけで、体の力が抜けて行くような気がした。

何万遍かの疑問が頭を過ぎった。

『何してるんだらう僕は……』

疑問を抱えながら、僕は港とは反対方向へ歩いた。このまま民宿に戻るのも、嫌だったので道なりにどンドン歩いて行った。

途中、道が二つに分かれていた。一つは坂になつていて山の方へ繋がっているらしかった。僕は、平坦な道を選んで歩いた。道の両端は藪になつていて、道のいたるところに、大きな蛙の死骸が、車にでも潰されたのだろうか。干からびて平になり蛙の形だけを残して太陽の照り返しに、さらされている。

僕は道を進んだ。途中ハカラメラらしき植物の葉を取りながら進んだ。二十分も歩いただろうか。生い茂った木々のトンネルの向こうに砂浜が見えた。海だ。

砂浜は白かった。海は、濃い青空を映して、エメラルド色に輝いていた。こんな海を見るのは初めてだった。

『奴も見たんだ……』

砂浜には、誰もいなかった。「まだ、シーズンじゃないのかなあ」僕は、砂浜に座り海を眺めた。

『病気……』あの街で聞いた事は、全部幻聴だったらどうする。確かに、アパートから外へ出た時は、誰も居なかった。僕が聞いているのは、声だけだ。でも、ハッキリと聞こえていた。

そう思うと、自分の意識も危なくなつて来た。船上での出来事は、幻覚だったのか。まさか……。違う。

手に持ったハカラメラをギュツと握った。違う、違う。僕は否定した。自分を信じるんだ。実際にあつた事をしっかり認識しよう。幻聴でも幻覚でもない。自分の意識と認識力を信じるんだ。僕の脳は壊れていない。

ある事の認識は、あの時もギリギリの所でして来た。思う事の認識もしっかりしてきたはずだ。僕は間違っていない。狂つてなんかいない。

しかし、解らない事がある。船室でも札幌のアパートでも、僕は男の声を聞こえるはずの無いところからハッキリと耳にしている。何か一連の出来事と関係があるのだろうか。

いや、それは考えない方が良く僕は思っていた。酷く疲れていて要らぬ経験をしたんだと思ひ込もうとしていた。

しかし、そう思うと僕は、今何をしているのだろう。とまた、疑問が沸いてくる。要らぬ経験では無く。貴重な経験としたらどうだろう。それに、この不可思議な出来事は、僕だけが経験していることでは、ない事がハッキリしている。船上の切腹やろうも、自殺した友人もみんな、得たいの知れないもの存

在を感じてその結果が、最悪の結果となったんじゃないのか。

『得たいの知れないもの……』

この世の中に、完全犯罪があるとすれば、人々だ。多くの人間が関わって、一人の人間を消そうとする力だ。

僕の認識力は、壊れていない。無いものには、思考は動かない。そこに、あったんだ。何かが存在していたんだ。

現にこの海からは小波の音しか聞こえない。あとは、照りつける太陽があるだけ。可笑しな音も声も、眼前には青い海しか見えない。

それが変だと言うなら、そいつが変なんだ。ここは、小笠原だぞ。人が蠢く街の中じゃない。僕は正常なんだ。正常に、ある事に反応しただけなんだ。

僕は、ハカラメを砂に埋めた。何故、ハカラメだったんだ。僕は、あいつの面影を追っていただけだったんじゃないか。僕は、勝ったんだ。あいつに勝ったんだ。僕は、まだ生きている。

生きている以上、死ぬまでに何かが出来るはずだ。戦いなんだ。人間たちの戦い。緻密で精巧な社会が生んだ、歪みで戦いが起きている。

『やれるか……』正直恐ろしい。自分に何が出来るのか解らなかった。特別、何かをしたいと言う事も思い当たらない。

『無力だ』道具も仕掛けすらも思いつかない。僕には、武器が無い。無力過ぎる自分に、恐怖すら感じた。

いつまでも、島に居たいと思った。街には戻りたくなかった。しかし、明日には船に乗らなければならぬ。

『無力な自分が出ることってなんだ』思考が停止したかのように、僕の頭はそれを考えると真っ白になった。

みんなは、どうしているんだろう。みんな仕事人間だ。仕事に没頭して危険な事を避けようとしているのか。大儀名文が仕事なのか。

どうすれば、いいんだ。もしかすると、狂わなければ、仕事人間にはなれないのか。どちらにしても、正常にはいられない。

だったら、どうせ正常にいられないなら、ここをスタートにして、好きな事をしようじゃないか。

生前の彼と話した事がある。「僕は一遍の小説を書く」と言うと彼は「作家

にでもなるのか」と聞いて来たが、そんな大それた事は考えていなかった。

そうだ。書こう。今の事を。好きな事をしていれば、その内いい事もあるかもしれない。いや、好きな事をしているのだから、これほどいい事は無いじゃないか。

明日、船に乗ろう。心に強く思い、僕は服を着たままエメラルドの海へ飛び込んだ。海中には、色とりどりの魚が泳いでいた。